様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０９３７

研究課題名（和文）ポスト紛争地域における情動と芸術表現についての人類学的研究-スリランカを中心に

研究課題名（英文）Anthropological study on emotion and representation of arts in post conflict Sri Lanka

研究代表者
足羽　與志子（Ashiwa, Yoshiko）

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：３０２３１１１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：スリランカの仏教寺院の19世紀末から現代までの壁画を中心に内容、構成、製作者、社会的背景、影響等の調査により次の成果があった。１）ブッダの生涯、仏教伝来史、仏教王朝史、ジャータカ物語などがテーマの壁画は、人々が知る寓話を視覚として喚起し、民族紛争時の暴力と情動の経験を重ね合わせて、苦悩に意味を与え、批判も含めた宗教的和解を可能にさせている。２）現代の寓話として寺院壁画の意義は高区、壁画制作を伝統的職能の一つとする低カースト集団の役割は大きい。３）欧米等の特定のミュージアムやアート空間と同じく、仏教寺院はイメージハウスとして、社会に深く関わるパブリック・アートの役割をも担ってきた。

研究成果の概要（英文）：My main research is on the murals of Buddhist temples in Sri Lanka since late 19th.century, focusing on their contents, structure, artists, social and historical contexts, and influence on people. Key findings are; 1) murals, which are mostly about the life of Buddha, history of Buddhism, Buddhist royal kings, and Jataka stories, evoke visual sensations among people who have had violent and emotional experiences during ethnic conflicts and helps to project their experiences through the images of murals; 2) people could gain meanings for their experiences, and achieve religious reconciliation, including criticism on the perpetrators of the violence. Murals had significant functions as contemporary allegories, and the social roles of artists from the traditionally low caste community are highly demanded; 3) Buddhist temples, as image houses, have pursued socially committed public art, as the public art of specific museums and art spaces in Western society.

研究分野：文化人類学

キーワード：仏教寺院　壁画　芸術　ポスト・コンフリクト　パブリック・アート　寓話　文化表象　和解

１．研究開始当初の背景

30 年近く内戦状態にあったスリランカの民族紛争は、数十万人の犠牲者、行方不明者を出したのち、2009 年武力によって終結した。しかし内戦時の暴力に加えて、終結後も目に見える暴力、見えない暴力が続き、シンハラ、タミル、モスリムのどの民族も、人々が共有していた従来の価値観やモードが大きく揺らいでいる。社会的リーダーから一般の人々まで、それぞれの状況と願望によって生き延びるために取った様々な手段や行為のある部分は、全体としての宗教的、慣習的、法曹的モラルに影を落としており、ポスト紛争の時代になってもコミュニティや社会の安定や統一に向けての道は困難が多い。

人々の感情の揺れや混乱は、個人や集団による現実認識や現実感そのものに大きな影響を及ぼす。そのため紛争終結後の社会再生、再編成のためには、経済成長や復興だけでは十分でなく、人権問題を明確にしながらも同時に他者や自己を受け入れ、和解の価値観を作ることが最も重要である。しかしながら国際社会や国内政治、またメディアなどは、ポスト紛争の国家再建に伴う経済や政治の急激な変化については深い関心を払うが、価値や意識の問題についてはふれることがない。

近年、研究者によってポスト紛争状況において暴力が社会や個人に及ぼした文化的影響と人々やコミュニティの文化による再生の重要性は指摘されてきた（Das 2006）。しかし精神疾患など直接的なデータ収集は一部されているが、今もなお特定地域の実証的データに基づく人類学的研究は非常に少ない。情動、宗教、伝統的文化の問題、またポスト紛争の価値創造において、アートや芸能による活動を論じた研究においては未着手の状態である。

研究代表者の足羽はスリランカの民族紛争の調査と並行して、長年、民衆芸能とアート、民間治療儀礼と仏教の研究を行ってきた。スリランカの文化と民族紛争の研究を継続するなかで、政治的、経済的、武力的対処や解決のための研究はあっても文化への注目が極めて少ないことを研究論文及び複数のメディアや会議において繰り返し指摘してきた。また他地域での関連問題の研究(米国の平和運動、現代中国のポスト文革期の宗教復興研究など)においては、暴力と文化的制御の問題を追及し、大規模な破壊が人々の及ぼす感情や行動への影響を論じ、社会変動と価値生成過程の研究の構築を進めてきた（足羽 2009,2010a,2010b）。とくにポスト紛争時に民間宗教、芸能、現代アートの領域が非常に重要になっていることに注目し、これらの問題に対して本格的な研究の必要性を指摘してきた。

参考文献

Das, Veena　2006　*Life and Words: Violence and the Descent into the Ordinary.* California University Press.
足羽與志子　2009 「スリランカ内戦終結−平和の文化にむけて」『世界』12 月,no.798,pp.25-28.
2010a 『平和と和解の思想をたずねて』「平和と和解の研究センター」編（共編著），大月書店，pp.1-345.
2010b 「暴力の対時点−スリランカとニューヨークから」『平和と和解の思想をたずねて』「平和と和解の研究センター」編（共編著），大月書店　pp.316-341.

２．研究の目的

本研究は、３０年近い紛争を経験したスリランカにおいて、民間の伝統的芸能者および芸術家が人々や社会が被った暴力的経験の多様な解釈と表現を行ってきた事実に注目し、その活動と思想、社会的影響を明らかにすることを目的とする。そのためにはスリランカにおける調査を行うと同時に、問題群を比較しその普遍性を問うために、集合的暴力を被った他の地域の人々の感情と多層的リアリティの在り方、そして文化的表現活動と社会的文脈の結節点としての博物館、美術館、モニュメント、パブリック・アートの比較研究を行う。本研究はポスト紛争地域における文化ならびに情動、そして芸術の働きについての基盤的研究を築くことを目的とする。

３.研究の方法

本研究は以下の方法によって遂行した。

１）スリランカにおける資料収集、聞き取り調査、訪問調査、視察、観察を行った。主たる調査の対象と内容は以下のようである。
①スリランカにおける伝統的儀礼芸能集団であるベラワー・カースト（マータラ、ゴール、カルタラ地域）のコミュニティの生活と治療儀礼の現状について聞き取り調査と観察を行った。
②芸術系の大学での教員、学生、とくにベラワーの出自とアートの関係、現代アートと伝統アートの教育カリキュラム、評価基準、卒業後の就職状況について聞き取り調査及び資料収集を行った。
③19 世紀末から 2010 年代にかけて再建及び再建された主要仏教寺院のうち、コロンボを中心とする壁画で著名な寺院約 10 件を対象とし、とくにケラニア寺、ベッランウィラ寺については詳細な記録と製作関係者への聞き取り調査を行った。
④スリランカ南部及びコロンボのマラダーナ地域における仏教復興と仏教復興支援者ゆかりの壁画の記録採集と聞き取り調査を行った。
⑤現代アート専門のギャラリー、研究者、アーティストを対象とし、とくにベラワー出身のアーティスト及びその作品についての聞き取り調査を行った。
⑥タミル居住区のバティカロ及びジャフナ

における現代アーティストへの聞き取り調査を行った。

2)スリランカ以外の地域において、激しい暴力経験の歴史があり、現代アーツや伝統的様式による表象が社会の価値生成に寄与している主要ケースの調査を、スリランカとの比較において補助的に行った。この調査は今回の研究を基盤として次の研究に展開させるための補助線となった。例えば、タイのバンコックを中心とした仏教寺院及び現代アートサイトの調査、中国福建省廈門市における国際仏教美術見本市の調査、スペインのレイナ王妃国立美術館でのゲルニカ関連調査及び植民地博物館調査、カナダでのブリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館調査及び先住民現代アートの展示調査、シカゴのアートインスティトュートにおける資料調査などである。なおこの調査については本研究支援費用以外の他の資金の協力も部分的に得ている。

3)国内外での研究会の開催及び研究交流を行い、本研究のデータ分析と問題意識の精緻化、理論的展開に役立てた。くわえて関連文献研究、資料収集を行った。３年間の内外の研究協力者は 10 名ほどになった。研究の公的発表については、論文執筆のほか、国内及び海外の大学での招待講演、講義の場を活用した。

４．研究成果

暴力及び暴力に対する反応は、被害者と加害者の二極対立をうむ。しかし加害者は被害者でもあり、被害者が加害者である多重性は暴力の実態において頻繁に発生する現象であり、ましてや長い時間に蓄積された暴力行為においてはいっそう複雑さを増す。こうした状況に起因する人々の感情の揺れは、多層的なリアリティを生み出さざるをえない。

本研究は、以上のような問題を抱えるスリランカのポスト紛争状況において、民間の伝統的芸能者および芸術家の活動が活発に行われている現状をとらえ、実態を調べ把握し、分析を行うことにより、これらの活動が人々の感情や重層するリアリティ、複数の解釈を形づくること、そして人々の現実とその認識との齟齬や断絶に架橋し、日常世界への表出を牽引する可能性が高いという結論を得た。本研究では、以下の点において、現状の特徴を明らかにすることができた。

1)スリランカにおいては、曖昧だが確実に人々が注意を払っている言論統制的状況があるが、それにもかかわらず、伝統芸能保持者や現代芸術家集団は人々の情動を表現した多様な表現活動を行い、また海外の活動母体との公的、私的なネットワーク展開も徐々に活用しはじめている。こうしたことから、伝統芸能保持者や現代アーティストは政治規制を超えて、文化を表象し人々の感情や意識を形として表出させる一方では、感情や意識に一定の方向性やフォーマットを与えるなどの行為を通じて、社会に一定の影響力を与え続けることが可能である。

2)仏教寺院の壁画は一般的には伝統芸能を専らとするベラワー・カーストの技能者によって描かれる。本研究で選んだコロンボ郊外にある寺の一つには、激しい暴力状態にあった民族紛争末期に描かれた壁画がある。本壁画はベラワー出身の民間アーティスト、ソーマバンドゥが僧上との話し合いにより、描いた。一般の仏教寺院の壁画と異なり仏教説話からテーマを選びながらも、人間の欲望、執着、業行を描き、さらに主として女性の不幸と嘆き、そしてブッダによる癒しを取り入れた壁画を構成し、また描き方も独自の現代アートを取り入れた手法をとっている。本研究において、一般の人々に人気の高いこの寺の壁画は、人々の経験と仏教説話と重ね合わせて経験の仏教的意味を暗示し、暴力を被った人々が複雑で重層的なリアリティのなかに生きることを理解させ、了解させる機能があることを明らかにした。

3)このような仏教寺院と壁画の関係は、激しい社会変動と仏教復興運動が生じた１９世紀末から２０世紀前半において、重篤に見られることが、スリランカ南部地域及び中央高地地域、西南海岸地域の寺院調査によって明らかになった。これはベラワー出身のアーティストが当時の絵画の西欧様式と伝統的様式の折衷様式を生み出したことに大きく起因していることが、本研究により新たに了解できた。ケラニア大学の研究者との共同調査によっても以上のことが確認できた。

4)スリランカ以外の地域での調査においては、ローカルなサイトで生じた暴力がアートあるいは伝統的技能によってローカルな空間において表象され、それが世界的、歴史的文脈におかれた場合には時代が要請する「普遍的」インパクトを生む、という共通性を了解した。ゲルニカのように歴史が浅い暴力については現実の政治力が働き、直近の暴力再発生を防ぐ現代の普遍的表象となる。しかし、例えばヨーロッパによる植民地支配が産出した文化融合としてのアート表現の表象形態は、二極構造だけでなく文化作用による多重性の受容への融和のありかたを示唆する。この点はスリランカの民族紛争とジャータカ物語の接続について、現行の暴力の表象と時間的空間及びイメージハウスとしての仏教寺院のあり方の新たな理解を深めるものである。

5)仏教寺院が宗教的美術館、博物館としての役割があり、特に壁画においてパブリック・アートとしての解釈、分析が有効であること

がわかった。それはスリランカだけに限らず、むしろ急激な経済成長を遂げるアジアの都市部の寺院、また西欧に展開する仏教寺院においてその傾向が強い。例えば、現代アートの先進地域であるタイでは都市中間層が多く訪れる仏教寺院が普通は大きな美術館やモダンアートギャラリーには行くことがほとんどない市民にとっての博物館、美術館的役割を担っている。また中国福建省の厦門市における仏教美術見本展の調査では、富裕層の移民による西欧社会での仏教施設建築ラッシュにおいて 3D 技術を使用した古典的形態の仏像の複製に人気が集まっていることを了解した。
6)厦門大学（中国）、ポンペウ・ファブラ大学(スペイン)、中文大学(香港)において、招聘講演、講義を行い、本研究の成果の一部の発表を行った。これらの成果発表では、専門家及び異なる研究領域の研究者との意見交換を行い、本研究が先駆的研究であることを確認し、また有益な示唆と今後の共同研究への手がかりを得ることができた。

本研究はポスト暴力地域の文化及び情動の研究、芸術／芸能の遂行性についての研究、象徴表現と現代アート及び宗教性の研究という三つの研究分野を交差させ、その結節部分に新しい研究領域を立ち上がらせることにおいて、予想以上の成果を収めることができた。ポスト紛争期のスリランカでの調査を中心としながら、アートと伝統芸能、現代政治との関係に、人々の経験と認識を架橋させ、深く傷ついたコミュニティの再生を図る契機があることを明らかにした。本研究は新しい研究領域を切り開き、今後の研究展開への基盤形成となった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計５件）

① 足羽與志子　2016 年「スリランカにおける仏教寺院壁画と現代の寓話」『国立新美術館紀要』vol.3, p.82-125,査読有
② 足羽與志子　2015 年「イメージを巡る比較と始原の探求について」『国立新美術館紀要』vol.2, p.240-263, 査読無し
③ 足羽與志子　2014 年「視点の逆転、親密な相交」『イメージの力』国立民族学博物館、p.62-65,p.206-209, 査読無し

〔学会発表〕（計５件）

① Yoshiko Ashiwa, *Layers of Encountering Buddhism between China and Sri Lanka from the Time of Modernization to Current Global Context.* Public lecture and seminar of the lecture series on Globalization and Religion, March 28, 2017, Chinese University of Hong Kong (Hong Kong)
② Yoshiko Ashiwa, *Globalization and Images : immobility, public art and religion.* Erasmus Global Week lecture for Global Studies, February 23, 2017 Pompeu Fabra University (Barcelona, Spain)
③ Yoshiko Ashiwa, *Some Perspectives on Global Studies in the Non-western Academy.* Global Studies in Japan and East Asia, International Symposium, November 16, 2016, Sophia University (Tokyo, Japan)
④ Yoshiko Ashiwa, *Buddhism, Popular Culture and Globalization.* Lin Huixiang Memorial Lecture, October 9, 2015, Xiamen University (Xiamen, Fujien, People's Republic of China)

６．研究組織

(1)研究代表者
足羽與志子（ASHIWA,Yoshiko）
一橋大学・大学院社会学研究科・教授
研究者番号：３０２３１１１１

(2)研究協力者
Ravi Bandhu
J.B.Dissanayake
Richard Gombrich
五十嵐 理奈（IGARASHI,Rina）
Asoka Mendis de Zoysa
Gananath Obeyesekere
Anoli Perera
Sasanka Perera
Pala Pothupitiya
Madhubhasini Ratnayake
陳 先清(Zhang Xianqing)